# 論文の内容の要旨

論文題名　インドネシア・ジャワにおける宗教と政治
　　ースハルト新体制下の国家政策と諸宗派の動態の民族誌的研究

氏名　　福島真人

現代社会に於ける宗教の研究には固有の困難がつきまとう。それは宗教という概念が持つ多項目配列的な性格によって、それが具体的に何を示すか、文脈によって大きく異なるからである。現象論的には、一方で全体的な世俗化の予言がなされると同時に、宗教の再生現象とでも呼べる、様々な原理主義、復古主義的な運動が世界各地で見られる。こうした宗教変化の多様性を表現する為に、社会科学はいくつかの概念的装置を用意してきた。一つは階級分析の伝統とでも呼べるもので、特にウェーバー (M.Weber)の宗教社会学に端を発した、階級と宗教的志向の関係は、ブルデュー(P.Bourdieu)の『ディスタンクション』等にその影響を見る事が出来る。一連の文化的再生産論は、宗教的な変動を記述する為に、いくつかの社会的な階層を想定し、相互に独立した変動と表現する事が可能であるが、他方この分析の為には、階級現象が確固としたものとして観察されるという前提が必要となる。

もう一つのアプローチは、デュルケーム(E.Durkheim)の社会分業論の伝統を踏襲したもので、近代社会を、高次に機能的に分化した社会と捉え、その文脈で宗教の命運を考えるというものである。この一連の流れの中で、最も理論的な完成度の高いのはルーマン(N.Luhmann)の議論であるが、そこでは現代社会を構成するサブ・システムは高度の自律性と閉鎖的な自己産出性を持つとされる。本博士論文は、こうした理論的理解を前提として、政治と宗教が、総体的に分化していく過程の中で観察可能なミクロのレベルでいかなる変動がおこる

のかを、インドネシア・ジャワ島に於ける人類学的なフィールド調査を中心として分析したものである。

ジャワに於ける宗教研究という学説史的な文脈では、ギアツ(C.Geertz)の研究以降、特にジョクジャ(Yogyakarta)、ソロ(Surakarta)の伝統王宮を中心にして形成された王宮中心的なイデオロギーで文化的に解釈するという傾向が顕著であり、それは最近の研究にも受け継がれている。だがこれは既により高度に機能分化した社会へと移行する為の、多く見られる過渡期的な現象と捉えられるべきで、このモデルでは多くの宗教現象はうまく解釈できない。ただし、高次の機能分化はあくまで全体の趨勢であっても、現時点では完了していない過程であり、その為にマクロのアプローチは、どれをとっても折衷的なものになる可能性は常にある。この論文では、全体として階級理論よりも機能分化論により注意を払う事になる。

実際に調査が行われた1980年代のインドネシアでは、スハルト(Suharto)大統領のいわゆる「新体制」下、全体として上からの政教分離が推し進められていた。特に与党であるゴルカル(Golkar)を梃子にして、イスラム勢力の政治性を剥奪し、他方それに対する対抗勢力( 例えばジャワ神秘主義の集団) に対しては政治的な庇護を与えるという政策である。こうした全体的な雰囲気の中で、フィールドワークは、ジャワ島北部の、所謂港湾地帯の農村及び都市で行われ、主に三種類の宗派をその分析の対象としている。一つは保守系イスラム最大の組織、ナハダトゥール・ウラマ( Nachdlatul Ulama「ウラマの覚醒」ＮＵ) であり、特にジャワ島北部や東部の農村部に強い支持基盤を持つ。二つ目は一般にクバティナン(kebatinan)と呼ばれるジャワ神秘主義系の宗派で、日本でいう新興宗教に当たるが、インドネシアではアガマ(agama)、即ち宗教という用語は公認の世界宗教にしか用いられない為に、その存在の根拠に法的な問題を抱えており、憲法の条文の解釈によって、「信仰」( クプルチャヤアン kepercayaan) 諸派と呼ばれて、政府の庇護下に入っている。三番目は、二十世紀初等に、ブローラ(Blora)周辺の山林地帯に発生した、反植民地主義的な農民運動の末裔で、その首謀者であるサミン(Samin)の名をとってサミン運動( 本人はアダム(Adam)教徒と呼ぶ) と呼ばれている。本論文は大きく三つの章からなるが、そのそれぞれがこの各宗派の独立した分析からなっている。

第一章は、Ｘ村と仮称する、クドゥス(Kudus)市近郊の農村に於けるＮＵの政治活動とその限界を、ハッサン(Hassan)という指導者を中心に分析したものである。Ｘ村は元来、世俗的な国民党とＮＵがほぼ拮抗した勢力を持つ村であ

ったが、インドネシアの政治体制がスカルノ(Sukarno)からスハルトへと移行し、村落レベルでの政治的な活動への締めつけが厳しくなってくるにつれ、その図式は解体してくる。特に公務員は政府与党であるゴルカルに所属する事が義務づけられ、ＮＵの主要な指導層は皆ゴルカルに回収され、村内のＮＵ組織は骨抜きになっていく。だがハッサンのように、元々ＮＵの活動家であった人間にとっては、そうした状況は一種のダブル・バインドであり、様々な努力によってその矛盾を解消しようとする。だが残されたＮＵとの紐帯を維持しようとする一方で、村役場は、様々な手段、例えば村内のゴルカル支持者養成のコースといったものによって、ゴルカルの基盤をより磐石なものにしようとして、ハッサンがその陣頭指揮を取らざるを得なくなるのである。このゴルカル化の過程が進むにつれ、残されたＮＵメンバーは政治的に過激化して、ついにはモスクの使用をめぐって衝突事件を起こす事になるが、村役場はその対立を調整する能力を失っており、結局ハッサンのような両義的な人物にそれを依存するしか無い事が判明するのである。

第二章は、クドゥス市に隣接するパティ(Pati)市を中心として、様々なクバティナン諸派の活動をＮＵとの対比の中で分析している。政府側から見ると、ＮＵがイスラム勢力の中でも最も手ごわい対立勢力だと見られるのに対して、クバティナン諸派は、様々な教義を信奉する宗派の寄り集まりである。数度に渡る変遷を経て、スハルト体制下では、クバティナン諸派は、「宗教」ではないが、それに準ずるもの(「信仰」)として、教育文化省管轄下になった。そしてこれらの諸派を統合して、イスラム勢力に対抗しうる政治勢力としようとする働きかけが成されていた。だがこうした統合は、それぞれの宗派間のスタンスの差(たとえば治療への関与についてや憑依現象を肯定するかといった)や、イスラムに対する態度の濃淡ともあいまって様々な困難を引き起こしていた。更に、彼らはゴルカルの傘下に入っていた訳だが、ゴルカルには既に多くのイスラム勢力が、公務員であるという理由で参加しており、ゴルカル内部で、クバティナンをめぐる政策の差が浮き彫りになり、それがクバティナン行政(特にクドゥスにおいてその傾向が著しいが)を麻痺させるという結果になっているのである。更にクバティナン勢力を統合する為には、彼らからある種の共通のエキスのようなものを抽出して、それを例えば教育に反映させたり、クバティナン共通の祈祷所を設けるといった形で具現化しなければならないが、その努力をすればする程、実質的な内容が希薄になるという矛盾に、彼らは晒される事になったのである。

第三章は、パティ県の内部に大きな集落を残しているサミンの民の分析である。サミン運動自体は従来オランダ植民地時代の歴史的な運動と考えられていたが、いくつかの地域では、現在でもサミン集落が残っている。彼らは強固な二元論的なイデオロギーを擁し、世界を人と物の秩序に分け、人の生産には性、物の生産には農業と考えて、それらを中心に社会を厳格に再構成する事をその教義の中核としている。その為に、彼らはその職業に関しては農業以外のそれを拒否し、特に商業を虚偽とする。更に性交＝婚姻であり、又婚姻関係が絶対的な教義の一つとされる為、一度結んだ婚姻関係は一生解消できないとされている。更に婚姻を中心とし、農業に基盤を置いた核家族が全社会の基礎とされ、それを越えた制度を認めない為に、彼らは古くはオランダ政庁、そして現在のインドネシア政府との間にも様々な軋轢を生じてきたのである。だが度重なる弾圧と、様々なローカルな懐柔により、彼らの態度にも微妙な変化が生じてきた。いわば憲法の解釈論争のように、彼らの中にも、その教義の解釈にリジッドに固執するものから、例えば村落行政に対して、より柔軟に対応するものまで現れてきて、それがサミン共同体内での分裂の傾向までもたらしているのである。

結論では、調査が行われた80年代以降の政治、宗教政策の変化を概観しながら、この三つの宗教活動の相互関係を総括的に考える。とりわけ社会システムの漸進的な分化の過程という枠組みから捉えた場合、これらの宗教的活動の反応はどう理解されるべきか。分化した社会システムの中での宗教というサブ・システムは、他のそれ、例えば経済や政治などと比べると独自な性格を持つと考える事ができる。それは、宗教が既に社会のサブ・システムに過ぎないのに、あたかも社会全体に意味を与えるような振る舞いをするという点である。だがこの「全体性への要求」を現実に実現するのは難しい。この意味で、ＮＵのハッサンのような人物と、サミンの民は両極端を形成している。つまりイスラムは、その全体性への要求を、政治、経済、教育といった諸分野に、そのイスラム的な色彩を投影する事によって、何とかその全体性を曲がりなりにも維持しようと苦闘するのに対して、サミン運動は逆に、その分化した外部のシステムを極力拒否する事によって、極小の世界に閉じこもる。つまり社会分化の趨勢に対して、マクシマリストとミニマリストの対応という極端があり、その中間にクバティナンが漂っているという状態なのである。そしてこうしたバリエーションは、高次に分化した社会における宗教のあり方の様々な可能性を具体的に呈示している。